

春日型灯籠

灯籠といえば春日型を指すほど、灯籠の基本となる春日型灯籠。

本歌は春日大社によく似ているものがあり、現在の春日型をつくる時の見本になったのでは無いかと言われています。

宝珠は下から露盤、請花、宝珠の三層で請花は複弁の六枚花卉です。笠は六角形で上部中央から角に向かって 隆棟があり、各隅に蕨手を彫り出します。火袋は六面、前後に火口があり、正面から左回りに鹿、雲、後戸、三笠山、透かしの順になる約束事があります。ただし一対で立てる時は変化します。中台は上部に六角形の受け壇が二段。側面は複弁の六枚花卉の請蓮華です。柱は上、中、下部に節を浮き彫りにし、節にそって子節をつけます。太さは上下同じです。柱の下の地輪の花弁は六枚、八枚、最高十二枚までつくることができます。全体にバランスのとれた形の良い 灯籠です。



奥之院型灯籠

形は春日型灯籠に似ていますが、全体的に彫刻が多く豪華なのが奥之院型灯籠。

本歌は春日大社の奥之院の前に建っているものといわれており、装飾の多さから春日型より一ランク上とみられています。宝珠は下から露盤、請花、宝珠の三層から成り、形は春日型と全く同じです。笠も同じ形ですが、軒の部分に相違があり、春日型の一重軒に対し、軒端の笠の厚み部分に切り込みが入った二重軒になっています。火袋は六面。上下部に各二本ずつ四本の帯が入るのが特徴です。中台は側面の部分に十二支が彫られています。この様式は、他に類を見ないので大きな特徴になっています。柱は円柱につくり、春日型と同じように上、中、下部に節をつけます。地輪は六角地輪で下に泥台をつけるというのが本式。上部を請花と反花の二段につくるのが特徴です。



善導寺型灯籠

どっしりとした重厚さと安定感が魅力の善導寺型灯籠。

本歌は京都の善導寺にあります。岡崎でつくられている善導寺型と部分的に似ていますが、形はほとんど違います。

宝珠は他の多くの灯籠に見られる蓮華、露盤がなく、笠の上に宝珠だけ。笠は六角で各隅に蕨手がありますが、簡略化され隆棟もなく太くて頑丈です。火袋は高さが詰まった上下に丸味をもたせた砲弾型で、茶道具に使う棗、茶筌、上瓶を彫るのが特徴です。中台には薄い段がつき、その下に六枚の簡略化された蓮華が入り、側面の下側にも六枚の請蓮華がきます。蓮華を彫る所は全て六枚の単弁の花弁が基本で、中台の側面にハート型の彫り込みがあるのも特徴の一つ。柱はずんどう型で、上部から裾広がりの帯状の彫り込みがあります。地輪は柱を受ける形で円型の浮き彫りがあり、地輪の座とよんでいます。



泰平型灯籠

全体にがっしりとして、重厚な感じを与える泰平型灯籠。

その意味では善導寺型と通じるものがあります。泰平型は庭に入ることが多い灯籠で、比較的好くつくられるものの一つ。笠や柱に特徴のある型です。宝珠は珠があり、その下に六角形の露盤がつき、これとエンソは水平につくられます。請花はなし。屋根の形は、善導寺型の丸味に対し、蕨手が大きく角ばった感じにつくられています。軒は一重軒です。火袋は六角で前後に火口があり、他の面に十×の形、月に雲、日に雲を彫ります。中台は火袋を受ける形にやや厚めの一壇の受け壇を彫ります。側面には杵も何もつけず彫り込み、側面を受ける形で六弁の請蓮華を彫ります。柱は円柱で、上、中、下部に幅の広い節を彫りますが、子節はありません。この柱は泰平型の大きな特徴で、他に類いを見ない独特のものです。



聚楽型灯籠

変化に富んだ形で彫刻も多く、派手なのが聚楽型灯籠。

聚楽といえば、かつて豊臣秀吉が京都に営んだ華麗な邸宅ですが、聚楽型も太閤型灯籠の太閤という名称と共に、秀吉と縁の深い灯籠といえます。太閤型とよく似ていますが、宝珠の請花は太閤型に比べやや厚く、花卉と花卉の間に背花をもった六弁の蓮華が彫られています。太閤型と同じく、露盤はありません。笠は六角で蕨手と蕨手の間の笠の部分に木の葉の先端のような切り込みがあり、軒は二重軒。火袋は六角形で、前後に火口があり他の面には透しや桐、半菊などを浮き彫りにします。厚い中台には受け壇がつき、側面の上部に直線的なシノギがあり、側面には定まりの獅子と牡丹が交互に浮き彫りされます。柱は上部をぐっと細く、下部は上部の2倍ほども太いという、大きな特徴をもっています。



永徳寺型灯籠

江戸時代に作られた四角形石灯籠を模作したもので、竿が短く、中台は四段で火袋は大きく正方形となって四隅を浮き出させ、窓は円形で格子になっている。

石灯籠は、宝珠、請け花、笠、火袋、中台、棹、露盤の七つの石を組み合わせて形成されるが、永徳寺型灯籠は請け花が、省略されることが多い。火袋は方形で月や、升目の模様が入り、中台も同様に方形である。棹は太秦型に似ているが少し短い。露盤の模様も簡単なものになっている。永徳寺型灯籠には、寺院の名前が付いていますが、見本になる燈籠が何処に有ったのか、古くから多くの永徳寺型燈籠が作られています。笠・火袋・中台は四角に作ります、柱は丸が多いですが四角もあります。



三日月堂型灯籠

不思議なアンバランスの魅力をもつ、三日月堂型灯籠。

本歌は奈良・東大寺の法華堂の前に建っており、建長六年大陸の方より渡ってきた石工、伊行末作であると柱に彫られています。

宝珠の先端のエンソは短く、宝珠、中台、地輪に彫る蓮華は全て単弁です。笠は六角で中央から隆棟があり、各隅に蕨手がつきます。笠が小さいので、火袋から中台にかけて重厚な感じを受けますが、全体には厚みが薄い特徴をもっています。火袋は前後に火口があり、上部に横連子を彫り、その下に縦連子、格狭間と続きます。これらの枠の線の美しさは、見所の一つです。また、格狭間の下には単弁で必ず十二枚の請蓮華がつきます。柱は上部を細く下部を太くつくるのが特徴。地輪は柱の受けがあり、単弁で八枚の反花があります。上が十二枚、下が八枚がきまりです。



太閤型灯籠

火袋、中台の側面に瓢箪を彫ることから、太閤殿下をイメージしたものであらうと思われる太閤型灯籠。

聚楽型と共に豊臣秀吉に深い縁があるといわれている灯籠です。宝珠の部分は請華の形が変わっており、蓮華の下の露盤がありません。笠は六角で、蕨手がつき蕨手と蕨手の間に木の葉の先端のような形の彫り込みがあり、軒は二重軒です。

火袋は六角形で上部と下部をしぼって胴張りをもたせ、太鼓のような大変珍しい形をしています。中台は上部に火袋の受け壇があり、側面の上部との間にシノギがつきます。側面は四角の枠なしで、瓢箪を彫ります。柱は円柱で上、中、下部の節の太さは均一。地輪は柱の下に十二弁の複弁の反花がつきます。

全体的に格好が良く、彫刻も派手な型といえるでしょう。



利久型灯籠

小型ながら豪華さが漂う利久型灯籠。

利久といえば、茶人・千利休を連想しますが、この灯籠の場合は正式には「利久」を当てます。名前から利休や茶道との関連を考えますが、とくに関わりを示すものはありません。宝珠は、請花も露盤もなく珠だけ。笠は六角で、真中が太い三本の彫り込みのある隆棟が、中央から各隅につながり、先端には蕨手があります。笠は厚く、下部は外側に広がり跳ねたつくり。軒は一重軒です。火袋は六角で若干胴張りのある形、丈は少しつまっており前後に火口があります。六面には一般的に日、月、雲を彫り、反対側に一面を上下に分けて上に縦連子の簡略化したもの、下に十、×を彫ります。

中台は独特で、上部に一段の受け壇がつき、側面はなしで中台の下部と柱との連結部から上に向かって、花卉の長い十二弁の複弁の請蓮華を彫ります。



濡鷺型灯籠

独特な形の為、一目で印象に残る濡鷺型灯籠。

火袋に鷺を刻っていることと全体の形から、霧雨の中に立つ鷺のイメージが伝わります。宝珠は玉の下に請花がなく六角の露盤がつきます。濡鷺型の大きな特長である笠は、円形で蕨手もなく、大きく重厚な形。その笠を六割する形で隆棟が浮き彫りされています。また軒の部分は隆棟も含めて一直線に切落されており、そのシャープな線は、他に類を見ない大胆さです。火袋は丈が短く、六画六面。前後に火口をつくり、他の四面には鷺を浮き彫りにし、×、+、雲を彫ります。

中台は大型で枳をとらず各面いっばいに格狭間を彫り、側面を受ける形で六弁の複弁の請花を彫ります。

柱は上、中、下部に子節をもった節を彫り、その節の間をえぐり込んだ形にします。地輪も複弁で六弁の反花を彫り、伽藍地輪に仕上げます。



柚木型灯籠

本歌は奥之院型同様、奈良の春日大社にあり、以前若宮社の柚の木の下にあったことから、柚木型灯籠とよばれるようになりました。

宝珠は、珠だけが笠の上にあります。笠は八角で、中心部から各隅に三本のロープが合わさった形で隆棟が彫られ、蕨手はありません。火袋も八角八面構成で、前後、横の二方向に火口があり、他四面は上から横連子、縦連子、二重にした杵、その下に杵をとって格狭間を彫ります。火袋の受け壇も八角で二段構成の蓮台式。側面がなく柱の接点から上に向かい八弁の単弁で割り花も彫る蓮弁を彫ります。柱は、上、中、下部とも同じ太さで、親節と子節を彫ります。地輪は六角で、中央部が少し窪み外に向かって盛り上がった形になり、蓮弁は割り花のついた十二弁の蓮華を彫ります。各側面には杵を彫り、格狭間を一つずつ彫り込みます。



桃山型灯籠

小型で可愛らしく、装飾のほとんどないシンプルさが魅力の桃山型。

「桃山」という名称から安土桃山時代を連想しますが、その時代との関連は不明です。笠の正面に桃の実を彫ることからきているかもしれません。宝珠は珠だけで笠の上にはあり、笠はお椀を伏せた円形で、装飾は何もありません。笠の正面に桃の実を一個、実の左右に一枚ずつ葉を浮き彫りにします。火袋は四面構成の円形で、前後に火口があり、杵を彫り込みます。他の二面には、日、月、を彫ります。中台も円形で、側面の上下にはシノギがつきます。柱も上、中、下部と同じ太さの円柱ですっきりとした形。地輪は皿を伏せた感じで一段の受け壇をつくり、伽藍地輪に仕上げます。この型は四尺ぐらいが一番美しく、それ以上になるとバランスに無理がでて本来の可愛らしさが失われるように感じられます。



西之屋型灯籠

神仏混淆といった感じの、アンバランスで不思議な構成が魅力の西之屋型灯籠。

本歌は、奈良の春日大社にあります。宝珠は珠、請花、露盤の三層からなっています。笠は四角で四隅は外に向かって跳ねた形。軒の上に張りをもたせ、下には垂木を彫ります。火袋も四角で前後に火口があり、二面の上下部に横帯、左右には縦帯を彫り込み、その中に幕を彫ります。中台は四角で二段の受け壇がつき、側面は二区に分かれます。中台の下側には四角の面に複弁の蓮華を彫ります。柱も四角で上、中、下部とも同じ太さ。地輪も四角で、上部に中台の下部の蓮華同様、蓮弁を彫ります。地輪の側面は、二区に分けてそれぞれ格狭間を彫ります。西之屋型は、五尺から五尺五寸程度のものが一番バランス良く、映りもよいようです。



江戸型灯籠

従来にない構成や新しい試みが光る江戸型灯籠。

名前から考えると、江戸の地と関わりがあるのか、または江戸好みといったところなのか定かではありません。宝珠は珠と簡略化した六弁の請蓮華がつき、露盤はなく直接屋根につづきます。笠は六角で中心から各隅に向かって隆棟があり、その先端は垂直に切られ、仏閣屋根の鬼瓦のようです。

蕨手はなく笠の先端は跳ねてあり、軒下は雨返しもなく直線的。火袋は区切られ、下部に六本の足がついた形で他に類を見ない様式です。構成は六角六面で、前後部に火口があり、他四面は右から縦連子と共に×、月、+、日を彫ります。

中台は六割した形で、簡略化した六花弁を彫ります。柱は六面で各面に丸味をもたせており、上から下まで六割した縦線を通す点が特徴的。地輪も簡略化された六花弁で、伽藍地輪に仕上げます。



吉野型灯籠

小型でシンプルながら、随所の丸みに女性的な魅力が漂う型です。

吉野という名称から考えて、奈良県の吉野の方から来たものといわれていますが、定かではありません。宝珠は六枚の花弁で玉を包む形をし、露盤はなし。笠は円形で、花を伏せた形で六花弁のようにつくります。火袋も円形で上下部に丸みをもたせ、丈は短くします。前後に火口があり、左右には月と日を彫ります。中台は花を上に向けた感じで六花弁のように作り、側面はなく丸くして柱へつなげます。柱も円柱で下部から細く彫り、上部から約四分の一の部分に帯を巻いたようにつくります。地輪は花を伏せた形で六花弁を彫り、伽藍地輪に仕上げます。全体に円柱を基本とした形で宝珠、笠、中台、柱、地輪が各々六割されており、その線が上から下まで無理なく通っている点が目をひきます。



六窓庵型灯籠

実に不思議な形をした灯籠で、本来は仏塔だったのではないかという推測もある六窓庵型。

宝珠は完全に開き切った蓮弁の状態を示しているようで、下に円柱状の2本の帯を締めた形の露盤がつきます。六窓庵型特有の笠は、下部が六角で上から同心円を描き、段差をつけながら下がっていきます。軒端は六角で各隅をはね、軒下は真っすぐ。火袋は六面構成で前後に火口があり、他の四面に立姿の仏像を浮き彫りにします。中台は受け壇もなく、上部は六角、下部は丸くし、十二弁の請蓮華を彫ります。側面は二区に分けて四角の枳を彫ります。柱は上下部を絞った形で胴張りをもたせ、上下部に二本の節を彫り、節間と柱の中央部に細い一本の筋を彫ります。地輪は六角地輪で、上部に丸みをつくり、そこに二十四弁の地輪の花を彫り、側面は四角の枳を刻って二区に分けます。



六角雪見型灯籠

純庭園型灯籠なら雪見というくらい、一番多くつくられかつ知られている雪見型灯籠。

初めから庭園用として鑑賞を目的につくられ、自然石の上に据えることを前提にしています。笠いっぱい雪を積らせ、その深さを側面から楽しむといったことから雪見の名称がついたようです。六角雪見型の宝珠は昔は小振りで笠と一体でしたが、最近はエンソを長くつくり、宝珠と笠は別につくる場合が多くなっています。笠は六角で比較的薄く、六隅の軒先は上に跳ねる形。火袋も六面構成で後ろに火口があり、他の五面は枳をとりその中に七宝透かしを彫ります。中台には二段の受け壇がつき、側面に波を彫ります。中台の下場は笠と逆の形で六隅に耳が下がっています。脚は四角構成で四本。下端部を外側に少し開き、脚と脚の中央から中台の耳のように垂れをつくります。



勸修寺型灯籠

笠、火袋、中台、柱、地輪の全てにおいて矩形が基調である。
変わった形の勸修寺型灯籠。

本歌は、京都・勸修寺の書院前の庭にあるといわれています。
宝珠は請花、露盤がなく、珠だけ。特徴的な珠の形は、上部三分の一ぐらいに筋状の彫り込みがあり、二枚重ねのように見えます。笠は幅が長く、奥行きの短い長方形。笠の四隅が笠の下場より垂れ下がっています。火袋も四角形で、四面に枠を取り、火口を抜きます。中台も矩形で上部が平で火袋を受け、側面もなく下部に向かい曲面をつけます。柱も幅が広く奥行きの短い長方体で、前面から見て、長方形の形で柱を抜いてしまいます。地輪も長方形の石板を、上に小さく下に大きく重ねたような二段の構成にします。ほとんど装飾らしいのはありませんが、形がよく、格好のいい灯籠といえます。



丸雪見型灯籠

純庭園型灯籠といえば雪見型。

その中でも六角雪見型と丸雪見型は対をなすものといえます。

丸雪見型は六角雪見型に比べて全体的に丸味があり、足なども丸味をもった猫脚で、おとなしい上品な感じを与えます。

宝珠は六角雪見とほぼ同じで下部を円形で薄くつくり、エンソを細長くします。笠は円形で、上部面に菊の花の花弁を浮き彫りにし、軒は一重軒で笠の下場に垂木を彫ります。

火袋も丸柱形で側面は前後、左右に枳をとって四面構成となり、裏側は火口で前部、左右に七宝透かしを彫ります。

中台は一段の受け壇があり、側面は四区に分割して中に波を彫ります。また側面の上部には、シノギがつきます。

脚は三本脚で、内側に入った感じの猫脚となるのが決まりです。



古代雪見型灯籠

六角雪見型や丸雪見型といった雪見型灯籠の原型となる古代雪見型灯籠。

他の雪見型より装飾が少なく素朴な点が魅力で、二尺五寸から三尺ほどのものが多くつくられています。宝珠は一般の利休型や蓮華寺型に似ており、請花も露盤もなく、珠だけが笠の上にあります。この点が派手なつくりの六角雪見型や丸雪見型と違い、素朴な味わいといえます。笠は六角で装飾はなく、軒の下は水平につくります。火袋も六角で、六面を枠にとり、火口を抜きます。この六面全部が火口として抜けている点が、古代雪見型の特徴です。中台も六角で一段の受け壇をつくり、側面は二区に分けて枠をとります。脚の上部には、中台を受けるように受け壇をつけますが、中台の下が丸い場合は丸く、六角なら六角の受け壇をつくります。脚は四本の丸味をもった曲線で、真っすぐ下に下がります。



みよし型灯籠

みよし型は、埋め込み型の灯籠の一種で、神社・仏閣や庭に入る灯籠ではなく、町の辻々に建てられて「道明り」の役目を果たしたものでした。

名前の由来は、昔、みよしという人が「若い頃の所業を改め、世の中を明るくしよう」という思いで辻々に灯籠を立てた、その型が原型になったことからきているようです。形は四角柱で、上部に火袋があり柱と一体になっているのが一般的な形です。また柱の前には「みよし」と彫ります。現在一般的につくられている道灯り灯籠は、笠のあるものやないもの、また丈の長いもの短いものなど、形はさまざま。もちろん、今日では辻に立てて明かりを灯すということではなく、小さな庭などの装飾として人気を呼んでいます。

